

## 青年の敬語使用に関する研究 (2)

廣 兼 孝 信

### A Study on the Speech Style of Adolescents II

Takanobu HIROKANE

第1報告(廣兼, 1990)<sup>1)</sup>では、現代日本文化における若者の言語的コミュニケーションの中で、敬語の使用がどのような心理的意味を持っているのかについて調査を行い、その結果から現代の若者はどんな場合でも年長者に対して敬語(特に、尊敬語や謙譲語)を使うべきであると考えているのではなく、当該の年長者が心理的に近い存在であると感じているときにはむしろ敬語を使うべきではないと考えているのではないかと推論した。すなわち、現代の若者は必ずしも敬語を使えないのではなく、あえて使おうとしないという可能性を指摘している。

では、若者が年長者に対して敬語を使おうとしないのは本当にその方がよいと考えているからだろうか。学校教育では、小学校1年のときから敬語に慣れさせ、5、6年での段階で丁寧語、尊敬語、謙譲語の使い分けができるように指導するようになっている。そのため、小学校の段階ですでに年長者に対して敬語を使うべきであるという規範意識ができあがっている(村上, 1985)<sup>2)</sup>。しかし、知識として敬語を身につけてそれを使おうと意識しても、いざ年長者を前にして実際に敬語を使おうとすると意外と難しく、間違った使い方も多い。1952年に国語審議会によって文部省に提出された「これからの敬語」という建議に従って、敬語表現の簡素化が図られたとはいえ、なお日本語の敬語が難しいとされるのは、かつて階級制度が厳しかった時代では状況に関係なくつねに敬語を使う絶対敬語であったものが、今日のように階級的身分関係がほとんどなくなった社会では、話し手が聞き手や話題の人との社会的・人間的関係を判断し、敬語を使い分ける相対敬語へと変化し、話し手が人間関係(すなわち、自分と聞き手と話題の人との関係)を的確に把握し最も適切な敬語表現を選択しなければならないからである(坂

詰, 1985)<sup>3)</sup>。すなわち、敬語を使用するためにはさまざまな敬語表現を覚えるだけでなく、それぞれの敬語表現がどのような状況で適切であるかという「適切さの判断」が要求される。そのため、現代の若者は敬語に対して煩雑な印象を持ち、同時に、敬語の使い方を間違えたときのそれに対する非難を恐れ、できるだけ敬語を使用する状況を避けようとしているのではないだろうか。そうであるなら、若者が親しい年長者に対して敬語を使おうとしないのはその方が相手に対して疎遠な印象を与えないようにするという積極的な考えによるものではなく、敬語を使わなくても年長者がそれを容認してくれるので敬語使用の煩雑さを避けられるという消極的な考えによるものとも考えられる。

そこで本報告では、現代の若者のどの程度が年長者に対して敬語を使用すべきと考え、また実際に敬語を使用しているのかを検討することによって、若者が積極的な考えから敬語を使おうとしないのかどうかを明らかにすることを目的とした。もしほとんどの人がどのような状況でも敬語を使うべきだと考えているにもかかわらず実際には使っていないとすれば、現代の若者は敬語を使えないといえる。一方、もし会話の相手や場面によっては敬語を使うべきではないと考える人が多ければ、あえて敬語を使おうとしないといえる。したがって、本報告では第1報告とは異なり会話の相手を話しやすさと性別で分け、発話場面も比較的フォーマルな場面とインフォーマルな場面に分けて検討した。ただし、言語的コミュニケーションを行う2者関係は第1報告と同様教師と学生の関係だけを設定した。これは、被調査対象である学生にとって教師は誰もが最も頻繁に相互作用を行い、かつ敬語を使うべきと考えられる唯一の年長者であるからである。

## 方 法

調査期間 1991年2月21日～27日

被調査者 本学、生活文化学科 163名、食物栄養学科食物コース119名、計282名。

調査内容および調査手続き 調査は「人間関係に関する調査」と題し、質問1として次のような教示を紙面によって行った。“いまから、大学内の先生の中であなたにとって話しやすい男性の先生、話しやすい女性の先生、話しにくい男性の先生、話しにくい女性の先生、を思い浮かべてください。そしてそれぞれの先生と次のような状況で話をすると、ていねいな言葉（敬語）を使っているかどうかについてあてはまるところに○をつけてください。”

発話場面として教師と学生という関係において比較してフォーマルな場面である「講義の後あなたが先週休んだ理由について先生に尋ねられたとき」（以下、応答場面とする）と比較的インフォーマルな場面である「講義の後友達と雑談しているところへ先生が加わってきたとき」（以下、雑談場面とする）の2つの場面を設定した。したがって、会話の状況としては、相手の性（2）×相手の話しやすさ（2）×発話場面（2）＝8つあり、各被調査者はそれぞれの状況において、実在する自分にとって話しやすい男性教師、話しにくい男性教師、話しやすい女性教師、話しにくい女性教師と応答場面および雑談場面で会話しているところを想定して、そのような会話の状況で相手に対してふだん丁寧な言葉（敬語）を使っているかどうかを、「いつも使う」、「使う時もある」、「使わない」の3件法で回答した。

次に質問2として、“前のような状況でそれぞれの先生と話をすると、ていねいな言葉を使うべきだと思いますか。あてはまるところに○をつけてください。”と紙面で教示し、8つの会話状況において丁寧な言葉（敬語）を使うべきと思うかどうかを、「使うべきだ」、「どちらでもよい」、「使わない方がよい」の3件法で回答させた。

なお、調査は一斉調査で、クラスごと8回に分けて行った。また、調査結果のフィードバックを希望するものについてのみ記名させ、希望しないものについては無記名で行わせた。

## 結 果

敬語使用の全体的傾向 8つの会話状況ごとに、丁

寧な言葉を「いつも使う」と回答した人の割合（敬語使用率）を算出した（Table 1）。これらの8つの比率の差を検討するためにコクランのQ検定を行ったところ、有意なQの値（ $Q=824.92$ ,  $p<.01$ ）が得られたため、マクニマーの検定を用いてライアン法による多重比較（有意水準はいずれも  $p<.01$ , 両側検定）を行った。その結果、話しやすさの比較において応答場面と雑談場面ともに相手の性にかかわらず話しにくい相手に対する方が話しやすい相手に対するよりも敬語使用率が高く、また発話場面の比較において相手がいずれの場合（相手の性×話しやすさ＝4状況）でも応答場面の方が雑談場面よりも敬語使用率が高かった。

Table 1 各状況における敬語使用率

	会話の相手			
	話しやすい		話しにくい	
	男性	女性	男性	女性
応答場面	33.3	42.9	89.4	89.4
雑談場面	15.6	22.3	66.3	69.5

単位は%, 各セル N=282

規範意識の全体的傾向 8つの会話状況ごとに、丁寧な言葉を「使うべきだ」と回答した人の割合（規範意識率）を算出した（Table 2）。敬語使用率と同様に、これらの8つの比率の差を検討するためにコクランのQ検定を行ったところ、有意なQの値（ $Q=598.36$ ,  $p<.001$ ）が得られたため、マクニマーの検定を用いてライアン法による多重比較（有意水準はいずれも  $p<.01$ , 両側検定）を行った。その結果、応答場面では相手の違いによる規範意識率の有意な差が見い出されなかったが、雑談場面では話しやすさの比較において相手の性にかかわらず話しにくい相手に対する方が話しやすい相手に対するよりも規範意識率が高く、

Table 2 各状況における規範意識率

	会話の相手			
	話しやすい		話しにくい	
	男性	女性	男性	女性
応答場面	81.9	85.1	97.2	92.2
雑談場面	44.7	46.5	70.2	69.9

単位は%, 各セル N=282

また発話場面の比較において相手がいずれの場合（相手の性×話しやすさ＝4状況）でも応答場面の方が雑談場面よりも規範意識率が高かった。

**敬語使用と規範意識の関連性** 8つの会話状況ごとに、丁寧な言葉を「使うべきだ」と回答し、かつ「いつも使う」と回答した人の割合（規範意識と敬語使用の一致率）を算出した（Table 3）。これらの比率の差を検討するために、まず発話場面ごとに2（相手の性）×2（相手の話しやすさ）の角変換法による $\chi^2$ 分散分析を行ったところ、いずれの場面でも相手の話しやすさの要因の主効果がみられ（応答場面、 $\chi^2=293.09$ ；雑談場面、 $\chi^2=141.10$ 、いずれも $p<.01$ 、両側検定）、話しにくい相手に対する方が話しやすい相手に対するよりも一致率が高かった（応答場面では、話しにくい相手 $\bar{X}=90.7\%$ 、話しやすい相手 $\bar{X}=43.6\%$ ；雑談場面では、話しにくい相手 $\bar{X}=76.2\%$ 、話しやすい相手 $\bar{X}=30.5\%$ ）。次に、相手の話しやすさごとに2（相手の性）×2（発話場面）の角変換法による $\chi^2$ 分散分析を行ったところ、いずれの相手でも発話場面の要因の主効果がみられ（話しやすい相手、 $\chi^2=12.30$ ；話しにくい相手、 $\chi^2=36.46$ 、いずれも $p<.01$ 、両側検定）、応答場面の方が雑談場面よりも一致率が高かった（話しやすい相手では、応答場面 $\bar{X}=43.6\%$ 、雑談場面 $\bar{X}=30.5\%$ ；話しにくい相手では、応答場面 $\bar{X}=90.7\%$ 、雑談場面 $\bar{X}=76.2\%$ ）。また、話しやすい相手の場合に相手の性の要因の主効果がみられ（ $\chi^2=7.85$ 、 $p<.05$ 、両側検定）、相手が女性教師の方が男性教師の場合よりも一致率が高かった（女性教師 $\bar{X}=42.2\%$ 、男性教師 $\bar{X}=31.8\%$ ）。さらに、相手の性ごとに2（相手の話しやすさ）×2（発話場面）の角変換法による $\chi^2$ 分散分析を行ったところ、いずれの性でも相手の話しやすさの要因の主効果がみられ（男性教師、 $\chi^2=232.49$ ；女性教師、 $\chi^2=167.38$ 、いずれも $p<.01$ 、両側検定）、話しにくい相

手に対する方が話しやすい相手に対するよりも一致率が高かった（男性教師では、話しにくい相手 $\bar{X}=83.4\%$ 、話しやすい相手 $\bar{X}=31.8\%$ ；女性教師では、話しにくい相手 $\bar{X}=84.9\%$ 、話しやすい相手 $\bar{X}=42.2\%$ ）。また、いずれの性でも発話場面の主効果がみられ（男性教師、 $\chi^2=24.04$ ；女性教師、 $\chi^2=19.42$ 、いずれも $p<.01$ 、両側検定）、応答場面の方が雑談場面よりも一致率が高かった（男性教師では、応答場面 $\bar{X}=67.5\%$ 、雑談場面 $\bar{X}=50.1\%$ ；女性教師では、応答場面 $\bar{X}=69.9\%$ 、雑談場面 $\bar{X}=57.5\%$ ）。

## 考 察

本報告は現代日本文化における若者の言語的コミュニケーションにおいて、敬語の使用がどのような心理的意味を持っているのかに関する第2報告で、敬語使用に対する若者（女子短大生）の規範意識と実際の敬語の使用状況を比較・検討したものである。

その結果、まず会話の状況、すなわち会話の相手や場面によって敬語の使用率が著しく異なることが判明した。応答場面では、相手が自分にとって話しにくい教師であると感じているときにはほぼ90%の人がいつも敬語を使っているが、自分にとって話しやすい教師であると感じているときにはいつも敬語を使う人は50%を切り、話しやすい相手ほど敬語の使用率が低くなる傾向が顕著に見られた。ちなみに、4人の教師いずれに対してもいつも敬語を使うと回答した人の割合を算出したところ全体の27.7%で、話しにくい教師には敬語を使い話しやすい教師には必ずしも敬語を使わないと回答した人の割合は43.3%であった。雑談場面でも、同様の傾向が示されが、驚くべきことに、話しやすい男性教師に対する敬語の使用率は15.6%と極めて低い値であった。ちなみに、4人の教師いずれに対してもいつも敬語を使うと回答した人の割合は全体の12.1%、話しにくい教師には敬語を使い話しやすい教師には必ずしも敬語を使わないと回答した人の割合は40.1%、いずれの教師に対しても必ずしも敬語を使わないと回答した人の割合は25.9%であった。また発話場面で比較すると、いずれの教師であっても比較的フォーマルな会話（応答場面）の方がインフォーマルな会話（雑談場面）よりも敬語の使用率が高かった。これらのことから、学生は相手教師の話しやすさやどんな内容の会話かを考慮して敬語を使ったり使わなかったりしているといえよう。

次に、年長者に対して敬語を使うべきであるという

Table 3 各状況において丁寧な言葉を使うべきだと回答した人の敬語使用率

	会話の相手			
	話しやすい		話しにくい	
	男性	女性	男性	女性
応答場面	38.5(231)	48.8(240)	90.5(274)	90.9(274)
雑談場面	25.4(126)	35.9(131)	74.8(198)	77.7(197)

単位は%、( )内は使うべきだと回答した人数

規範をどの程度受け入れているかについても、やはり会話の相手や場面によって異なっていることが判明した。応答場面では、いずれの教師に対しても80%以上の人がいつも敬語を使うべきだと考えているのに対し、雑談場面では、話しやすい男性教師に対する方が話しにくい男性教師に対するよりも、話しやすい女性教師に対する方が話しにくい女性教師に対するよりもいつも敬語を使う必要はないと考えている人が多かった。また発話場面で比較すると、いずれの教師であってもインフォーマルな会話の方がフォーマルな会話よりもいつも敬語を使うべきだと考えている人が少なかった。ちなみに、4人の教師いずれに対してもいつも敬語を使うべきだと回答した人の割合が応答場面では全体の81.9%であったのに対して雑談場面では44.0%と激減している。そのかわりに、話しにくい教師にはいつも敬語を使うべきだが話しやすい教師には必ずしも敬語を使わなくてもよいと回答した人の割合が11.7%から23.0%に増え、いずれの教師に対しても必ずしも敬語を使わなくてもよいと回答した人の割合は2.5%から28.7%に増えている。これらのことから、学生にはどんな場合にも教師に対して敬語を使うべきだというような規範はなく、たとえ教師であってもインフォーマルな会話のときには必ずしも敬語を使う必要がないと考えているといえよう。

さらに、8つの会話状況でそれぞれいつも敬語を使うべきだと回答した人がその相手に対して実際にいつも敬語を使っているかどうかを検討したところ、相手が話しやすい教師であるほど、あるいはインフォーマルな会話であるほど、敬語使用の規範意識と実際の使用とが一致していないことが判明した。また興味深いことに、同じように話しやすい教師であっても男性教師の場合の方が女性教師の場合よりもその一致率は低かった。これらのことから、たとえ教師に対して敬語を使うべきだという規範を持っていたとしても、相手教師やどんな会話かによって、必ずしも実行できていないと考えられる。

以上のことを総合すると、現代の若者は年長者に対して必ずしも敬語を使う必要はないと考え、相手によって敬語を使い分けているといえる（正しい敬語を

使用しているかは別問題）。特に話しやすい相手に対して必ずしも敬語を使う必要がないと考える人が多いことは、現代の若者は当該の年長者が心理的に近い存在であると感じているときにはむしろ敬語を使うべきではないと考えているのではないかという廣兼（1990）の推論を裏付けるものであり、若者は積極的な意味で敬語を使おうとしていないといえる。しかし、敬語を使うべきだという規範意識があってもそれが実行できていない傾向が話しやすい相手やインフォーマルな会話で顕著なことから、敬語を使わなくても許されるのではないかと思う相手や場面では甘えから煩雑な敬語を苦勞して使わない人も少なくないといえる。したがって、若者が年長者に対して敬語を使わない現象は確かに存在するが、その中には面倒を避けて使わない場合と年長者に対する親和的な気持ちを表す場合があるということに注意を向けるべきであろう。

さて、年長者に対して敬語を使わないことが親和的な気持ちを表すとすれば、その事実をどのように受けとめればよいであろうか。少なくとも現時点では、年長者に対しては敬語を使うべきだという考え方が一般的である。したがって、本報告における被調査者もやがて社会に出たときに自分の規範と社会的規範のずれにとまどい、人間関係に支障を来すことも十分に予想される。荒木（1983）<sup>4)</sup>は、生徒が教師に対して敬語を使わなくなった現状をよしとする風潮が教師の側にも社会の側にもあると指摘しているが、積極的な意味において年長者に対して敬語を使わないことをすすんで許容するのか、あるいはそれを否定するのか、社会的な問題として考える時期がきているように思われる。

## 引用文献

- 1) 廣兼孝信 1990 青年の敬語使用に関する研究 広島文化女子短期大学紀要, 23, 13-18.
- 2) 村上京子 1985 児童の敬語規範の獲得 日本教育心理学会第27回総会発表論文集, 246-247.
- 3) 坂詰力治 1985 敬語 思いやりのコミュニケーション 有斐閣新書
- 4) 荒木博之 1983 敬語日本人論 二十一世紀図書館

## Summary

The purpose of this study was to investigate the speech style of adolescents, especially, their norms of the polite speech, and the relation between their norms and their speech styles.

---

Results indicated that they had the norm that the speech to the unintimate elder should be more polite but the speech to the intimate elder should not be polite, however their norms didn't always accorded with their speech styles.